

はじめに

アジアが熱い。2008年には日本（1964年）、韓国（1988年）に続いて北京でオリンピックが開催された。また、2010年にはやはり日本（1970年）に続いて上海で万博が開催された。そして2011年7月、第6回女子サッカーワールドカップ（W杯）ドイツ大会で、日本代表「なでしこジャパン」が初優勝した。これは、今年3月11日に起きた東日本大震災以降、沈み込んでいた日本社会に明るい話題を提供した。いまや、政治、経済、社会等あらゆる分野でアジアのパワーが世界を席卷しつつある。

20世紀の世界経済は日米欧を中心とした先進国がリードしてきた。しかし、21世紀は中国、ロシア、インドを含めた開発途上国の力・存在が大きくなりつつある。それを象徴する出来事が、2008年に起きたリーマンブラザーズの破綻に端を発する世界的金融危機である。この出来事は、世界ナンバーワンの大国アメリカで発生したことにより、その被害・混乱は世界大のものになった。これまでこうした世界全体を巻き込む危機が発生すると、日米欧を中心とした先進国が協力してその対応にあたったが、今回は当のアメリカで起きたため、それに対処できる国・地域は日欧と考えられていた。しかし、この2国・地域とも自国・地域内への被害の拡大を防ぐのに手いっぱい、世界的金融危機を防ぐ有効な手段を講ずることができなかった。それに代わって登場したのが中国である。中国は自国への影響を最小限に食い止め経済を活性化させるために、40兆元（日本円で520億円）を超える財政を一気に投入し、内需拡大を中心とした景気浮揚策を実施したのである。

その結果、2008年のGDP成長率も8%以上の高成長を維持し、2009年には経済は引き続き高成長を維持することができた。この中国の内需の拡大を中心とした景気浮揚策は、多くの国の輸出先としても利用されることになり、世界的金融危機から脱出することができたのである。

この出来事は、もはや世界経済の諸問題は、日米欧だけでは解決することができず、逆に中国を抜きにしては、一步も二歩も先に進むことができないことを世界中に知らしめることとなった。中国は、2010年に日本を抜いて世界第2位の経済大国になり、国際会議の場でも、その発言は注目の的となっている。1970年代までは、政治的には大国であっても経済的に遅れていた中国は、今や政治・経済両分野において世界をリードするまでに力を強めている。

従って、アジアを知ることが、世界を知る有効な手立てとなってきたのである。しかし、いざアジアを勉強しようとする、その広さ・奥深さゆえに、どこから手をつけてよいのか戸惑ってしまうのではないか。本書は、そうしたアジアを知りたいがどこから手をつけてよいのか迷っているような初学者はもちろん、少しアジアをかじったがもう少し深くアジアのことを理解したいと考えている人に読んでもらいたい（もちろん、アジア研究の専門家にも読んでもらいたいのは言うまでもないが）。そのために取り扱っている内容は、経済はもちろん、政治的・社会的・文化的諸問題など、様々な領域にまで立ち入っている。その理由は、アジアは複眼的・多角的アプローチを駆使して初めて、その実像に迫ることができるからだ。さらに日本（との関連）についても取り扱っている。それは今まで日本は欧米にしか目が向いていなかったが、これからはアジアの一員として、アジアの発展のために共に行動してもらいたいとの願いがこもっているからだ。

本書の読み方であるが、それぞれの章が独立したものとなっているので、読者の関心・興味に合わせて、読みたい章から読んでいただいても構わない。そうすることによって、他の章への関心も高まるだろう。

最後に本書を通して、1人でも多くの人がアジアに関心を持ってくれればこれに勝る幸せはない。